

山陰海岸ジオパークにおける直下型地震遺産の保存と活用 Preservation and Utilization of Epicentral Earthquake Heritage in the San'in Kaigan Geopark

松原 典孝^{1*}, 先山 徹¹

MATSUBARA, Noritaka^{1*}, SAKIYAMA, Tohru¹

¹ 兵庫県立大 自然・環境研 ジオ環境研究部門

¹Inst. Nat. Env. Sci., Univ. Hyogo

近畿地方には多くの活断層が密集し、過去に幾度となく直下型地震が発生してきた。山陰海岸ジオパーク内でも、1925年の北但馬地震、1927年の北丹後地震、1943年の鳥取地震では大きな被害を被った。現在、それら震災遺構が山陰海岸ジオパークの中に複数存在する。山陰海岸ジオパークで起きた地震による災害とそこからの復興、震災遺産の保護と活用のあり方について議論する。

< 山陰海岸ジオパークが経験した巨大地震 >

1925年北但馬地震は北但大震災とも呼ばれ、震源は豊岡市の北部、推定される地震の規模はM6.8である。震源に近い城崎温泉街および豊岡の市街地に大きな被害を出し、その後発生した火災による被害も含めて死者428名の被害を出した。

1927年北丹後地震は丹後半島北部を震源として発生したM7.3の地震で2925名の死者が記録されている。この地震では共役断層である北北西-南南東(左横ずれ)の郷村断層と東北東-西南西(右横ずれ)の山田断層が同時に動いた。そのずれは郷村断層で最大横ずれ270cm、上下100cmであった。これらの断層は、日本で初めて活断層という用語が使用されたことでも知られている。

現在の鳥取市を震源として発生したM7.2の鳥取地震は、震度6を観測し、鳥取市を中心に死者1083人という大きな被害を出した。この地震では東北東-南南西に伸びた吉岡断層と鹿野断層があらわれ、その最大変位は鹿野断層で右横ずれ1.5m、南側が1m上がった。

< 震災復興と直下型地震遺産 >

北但馬地震により壊滅的被害をこうむった城崎温泉では地域が主体となり復興計画がつけられた。現在、当時の防火壁が観光サイトに残され、河畔の石垣には、震災時崩落した玄武洞の玄武岩が利用され、風情豊かな景観をつくり出している。豊岡市や京丹後市では、震災後に建てられた欧風の建物が震災復興のシンボルとして保存されている鳥取地震に耐えて残った鳥取市の五臓圓ビル(国指定文化財)は保存され、地域の人たちによる交流拠点として活用されている。

郷村断層の代表的な露頭3箇所が国の天然記念物として保護され、2箇所はジオサイトとして見学可能である。しかし、他の断層については、特に保護と活用はされていない。

< 直下型地震遺産の保存と活用 >

多くの震災遺構が山陰海岸ジオパークには残されており、それらを活用して防災教育を展開していくことが可能である。しかしこれらの体系的な整備や活用は十分ではない。防災教育のために、今後さらにこれらの遺産を整備し、活用していく必要がある。

キーワード: 地震遺産, 保存と活用, ジオパーク, 山陰海岸, 震災復興

Keywords: Earthquake Heritage, Preservation and Utilization, Geopark, San'in Kaigan, Earthquake Recovery